古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

当シリーズは「日本の神社と神々」と題し、記紀に係る代表的な神社を捉えます。「熊野大社」「伊勢神宮」、「出雲大社」、「住吉大社」、「宗像大社」、「宇佐大社」、「賀茂大社」、「籠神社」、「眞名井神社」の九つの神社を第一部から第四部に分けて解説します。記紀で述べる神代の世界は実存する神社の神と関係しているはずです。調べていくと記紀には明確には書かれていないが、記紀の神々に関与したと思われる神々が見えてきます。記紀を神社の観点から光を当ててみようという試みです。

第四部は「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」と題して、大和朝廷に直接関与する神社を訪ねます。賀茂大社が第一・二章、籠神社・眞名井神社を第三―五章で記述します。

著者：有限会社　情報戦略モデル研究所

井上　正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前 IT メーカーの SE やコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかったり、古代史は良く分からないと思われている初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれません。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元 SE としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれません。

古代史シリーズ5 「日本の神社と神々」の第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」では、賀茂大社が日本の神社祭祀の元締めの神社であり、籠神社・眞井神社では宮司の海部氏は古代大和朝廷に直接関係する海部氏系図、紀元前の漢鏡が伝承されている。そこに、徐福の渡来がある。記紀の神々の原点を三者から探ります。古代大和朝廷に直接関与する神社を訪ねます。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

+「日本の古社　賀茂社　上賀茂神社・下鴨神社」　岡野弘彦・櫻井敏雄・三好和義著(淡交社)
+「賀茂御祖神社」賀茂御祖神社編(淡交社)
+「上賀茂神社へのいざない」賀茂別雷神社(賀茂別雷神社)
+「葵祭の始原の祭り　御生神事　御蔭祭りを探る」下鴨神社宮司新木直人著(ナカニシヤ出版)
+「元伊勢籠神社御由緒略記」(元伊勢籠神社編)
+「元伊勢籠神社の略誌と神道哲学」宮司　海部光彦著(　(元伊勢籠神社編)
+「元伊勢籠神社しおり」(元伊勢籠神社編)
+「日本の神社　籠神社」　(デアゴスティーニ研)

＋「失われた徐福のユダヤ人「物部氏」の謎」飛鳥昭雄・三神たける著（学研）
＋「日本書紀」（宇治谷　孟著、講談社）
＋「古事記」（竹田恒泰著、学研）など
本冊子の古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」の全体構成は次の目次に上げておきます。

古代史シリーズ５「神社と神々」
第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」の目次

第一章「賀茂大社の創建由緒」……５
日本の神社の最初の司祭集団であるカモ氏と賀茂大社祭神を把握します。

第二章「賀茂祭（葵祭）と賀茂社の社殿」……１６
伊勢神宮創建の由来、式年遷宮、伊勢信仰の広がりの事由を捉えます。

第三章「籠神社・眞名井神社の由緒」……２９
天皇家に関わる日本最古の家系図を有する籠神社宮司の海部氏と
籠神社と奥宮の眞名井神社の由緒との関りを掴みます。

第四章「籠神社の祭神と徐福伝説」……４２
籠神社の祭神と徐福伝説における神々との整合性を検証します。

第五章「籠神社・眞名井神社の社殿と伝承」……５５
籠神社・眞名井神社の例祭、社殿様式、籠神社の伝承を把握します。

おわりに……６７

◆第一章「賀茂大社の創建由緒」の目次

第一話　賀茂氏の由来……6
第二話　上社・下社の祭神の御生（みあれ）……9
第三話　賀茂氏と秦氏の繋がり……12
コラム：「饒速日命（天火明命）と関係神」……14

第一話　賀茂氏の由来

賀茂大社とは、賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）と賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ）の併称である。両社は、一般に賀茂別雷神社を上賀茂神社（かみかもじんじゃ：上社）という。賀茂御祖神社は下鴨神社（しもがもじんじゃ：下社）という。両社は一体化され、伊勢神宮に次ぐ大社、官幣大社の筆頭として朝野の崇敬を得て来た。

賀茂大社の京都における地理から抑えておこう（参照資料1-1）。京都には京都市の中央を走る二本の川がある。嵐山を通って流れる桂川と賀茂大社から流れてくる鴨川である。この二本の川は宇治川、木津川と合流し淀川となる。賀茂大社に関わる鴨川は、下鴨神社の処で高野川と賀茂川が合流して鴨川となる。合流地点に下社の下鴨神社があり、賀茂川に沿って上流に上社の上賀茂神社がある。一方の高瀬川を上流へ行くと下社の祭神が降臨された御蔭山（みかげやま：御蔭神社）がある。賀茂川沿いの上社と下社の中間にある久我神社は、下社の祭神が御蔭山から下りて現在の下社に遷られる時に一時居を構えられた場所である。賀茂大社の京都全体からの地理的位置づけが分かったところで、具体的な各論に入っていきます。

賀茂大社の祭神の由来は両社が密接に関係していることから、その位置づけは両社の祭神を一括して述べる方が分かり易い。

賀茂大社の祭神は、上社が賀茂別雷神（カモワケイカヅチノカミ）であり、下社が賀茂建角身命（カモタケツヌミノミコト）と玉依姫命（タマヨリヒメノミコト）である。祭神の由来を風土記の逸文「賀茂条」（「釈日本紀（しゃくにほんぎ）」所引）から引用します（参照資料1-2）。

「賀茂建角身命は、かって「大和の葛木山の峰」にいたが、「山代の岡田の賀茂（御蔭山）」を経て降臨され、「久我（くが）の国の北山の基（久我神

参照資料1-1：上賀茂・下鴨MAP

出典：ウィキペディアから原図引用

社の処)」に居を定めた(参照資料 1-1)。その命が、「丹波の国の伊可古夜日女(イガコヤヒメ)を娶(みあ)って「玉依日子(タマヨリコ)」と「玉依日女(タマヨリヒメ)」を生む。

玉依日女が石川の瀬見の小川(賀茂川のこと)で得た「丹塗矢(にのぬりや)」との間に生まれた子が「可茂別雷命(カモワケイカヅチノミコト)」である(参照資料 1-2)。丹塗矢は乙訓(おとくに:長岡京市の処)の社に坐(いま)せる火雷神(ホノイカヅチノカミ)であった。この御子神が「可茂(かも)の社」(上賀茂神社)に祀られる。そして、下鴨神社は、風土記に母神、祖父母神を「三井(みい)の社」(現在の 下鴨神社の境内)に祀ったと記述する。この御子神から見れば、母神の玉依姫命と祖父母神の賀茂建角身命と伊可古夜日女は「御祖神(みおやがみ)」になるため、下社は「賀茂御祖神社(かもみおやじんじや)」という。

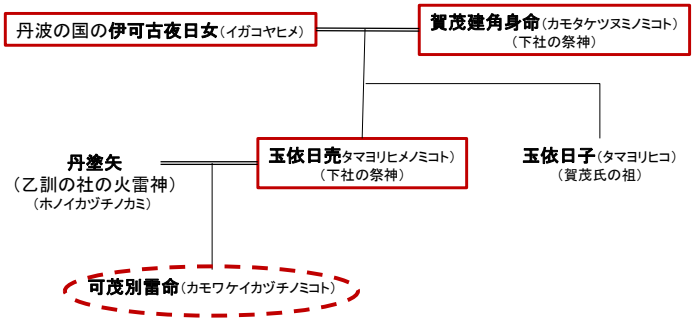
この祭神の由来を賀茂社祭神の古伝承は次のように解釈している。

「賀茂建角身命は、かって大和にいたが、山城の北の久我国の北山に移って来た。そして、丹波に勢力を持つ豪族と手を結び、その娘伊可古夜日女との間に玉依日女を生んだ。玉依日女が乙訓(おとくに)社で火雷神を祀る豪族と結び合わされて別雷神を奉ずる強い後継者に恵まれた」、かくして賀茂氏は賀茂の地域で一大勢力を築いていくことになった。

「山城国風土記」逸文の賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)の記述をみてみましょう。もともと「日向の曽(そ)の峰に天下り、南九州の高千穂にいた。やがて、神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコ)の東征にあたり、御前(みさき)に立ち(先導役を務め)、一旦、「大倭(やまと)の葛木山の峰に宿る」。つまり、大和の西方にいたことになる。けれども、そこからあらためて「山城の岡田の賀茂(御蔭山)」へ遷り、ついで「葛野河(かどのかわ:桂川)と賀茂川(鴨川)との会う所に定(しず)まる。両川の合流点辺りに居たことになる。さらに鴨川をさかのぼって「久我の国の北山の基(久我神社あたり)に定まります」と下社への定着を記述する(参照資料 1-1)。

日本書紀(720 年)や新撰姓氏録(810 年)から引用すると、「神武天皇が「中州(なかつくに:畿内)へ東征の途次、「山中」で迷った際、賀茂建角身命が「大鳥」=「頭八咫烏(ヤタガラス)」となって先導したところ、その功を賞されて「葛野県(かどのあがた)」を賜り、その子孫が成務天皇の御代(四世紀中)に「鴨県主」を定め賜った。」

参照資料1-2：賀茂大社の祭神の系譜



出典:「日本の古社　賀茂社上賀茂神社史の賀茂神社」
岡野弘彦・櫻井敏雄・三好和義著(淡交社)

と記述する。賀茂氏は八咫烏の先導の御礼で葛野県を賜り県主になったことを記述する。賀茂建角身命は神武東征後に下社の場所に定住したことになる。

この賀茂氏であるが、注「大宝令」注釈書の「古記(こき)令集解(りょうのしゅうげ)」所引)によれば、「天神(あまつかみ)」系と「地祇(くにつかみ)」系のカモ氏がいたと記述する。(注)奈良前期の天平十年(738年)ころに作られた。

「山城(山代)の鴨」は「天神」系だが、「葛木の鴨」は「地祇」系と区別している。「葛木の鴨」が後世、山城に移ってきたのではないと記述しているのである。この「天神系鴨氏」と「地祇系の鴨氏」との関係については、「京都産業大学日本文化史研究所紀要」(田中卓博士)の見解を引用する。

「地祇」系のカモ氏、鴨君・賀茂朝臣(かもあそん)は、元来三輪氏(神(みわ)君・大神(おおみわ)朝臣)と同じく大物主神(大国主命)の後裔である。この一族が早く原拠の三輪から葛木に移り住んでいた。

一方、「天神」系のカモ氏の鴨県主、賀茂県主は、注神魂神(カンダマノミコト)の後裔である。(注)邇芸速日命(ニギハヤヒノミコト)の随伴神。神武東征時は熊野辺りにいて、葛木に移ったが定着せずに山城の岡田から久我の北山(現在の久我社あたり)へ移り住んだ。つまり、下社の賀茂氏ということになる。「玉依彦命」から十一世孫の「大屋奈世(おおやなせ)」が十三代成務天皇(四世紀ごろ)より「鴨県主」を賜っている。

第二話　上社・下社の御生(みあれ)

祭神の御生祭(みかげまつり)が、葵祭(五月十五日)の前儀として五月十二日に行われる。御生祭を下社は御蔭祭、上社は御阿礼神事(みあれしんじ)という。御生(みあれ)とは神の誕生、来臨をいう。

下社の御蔭祭の起源は、現在の上社の西約一キロに鎮座する「久我神社」といわれる。注「日本三代実録」の貞観元年(859年)正月条に久我神(賀茂建角身命)〈加階(従五位下)し、「延喜式」神名帳に式内社として登録されたことが記述される。(注)日本の平安時代に編纂された歴史書。六国史の第六にあたり、清和天皇、陽成天皇、光孝天皇の三代である天安二年八月から仁和三年八月までの三〇年間を扱う。

参照資料1-３：下鴨神社の御生れ

出典:ウィキペディアから原図引用

1. 御生れ処

2. 御陰祭

古来注カモ氏の「氏神(うじがみ)」社」とされ、上社の摂社に位置付けられ、毎年十一月三日に神幸祭(神輿渡御:みこしとぎょ)がある。(注)天神と地祇のカモ氏のまとめ表現。

下社の御蔭祭の由来から見ていきましょう。御蔭祭の始まりはカモ氏神祭(うじがみさい)として最初は久我神社辺りで始まり、後に蓼倉里(たでくらごう:現在の下社境内)の三井社(三井神社)で営まれるようになり、奈良時代ごろに下社＝賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ)〈発展したと考えられる。三井社とは、祭神が、賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)、后の伊可古夜日女(イガコヤヒメ) と御子の玉依姫命(タマヨリヒメノミコト)の三柱を祀る「三身社」＝「三井社」である(参照資料 1-3)。

社伝では下社の造営は、崇神天皇の七年(BC90)に神社の瑞垣(みずがき)の築造がおこなわれたという記録が続日本紀にあり、それ以前の古い時代から祭神は三井社に祀られていたと考えられる。糺の森(ただすのもり)周辺の発掘調査で縄文時代の土器や弥生時代の住居跡がたくさん発掘され、下社の地域の存在を裏付けています。

下社の例祭に、五月十二日にカモ氏の本義ともいえる御蔭祭があります。御蔭祭の祭りの次第を追ってみましょう。

御蔭祭の目的は、御蔭神社の神殿で御生(みあ)れされた(新しく生まれ変わっ

た)賀茂建角身命と玉依姫命の荒魂の御神霊を本宮に御神馬で奉還し、本宮から還立(かえりだち:帰途)し、本宮の和魂と一つになられて御神威を回復される祭りである。現在は葵祭の前儀として行われています。

御蔭祭は、本宮からの宮司・神官により、「御蔭山の儀」と「御生神事」が祝詞などによって行われ、「御生木(みあれぎ)」に依りついた賀茂建角身命と玉依姫命の荒魂(あらみたま)の御神霊を櫃(ひつ)に込める。次に、路地祭(ろじまつり)と還立(かえりだち)の儀がある。

路地祭とは、御蔭山の儀によって神霊を移した「神霊櫃(しんれいひつ)を奉じて山を下り、行列は賀茂波爾(かもはに)神社での路地祭を経て、還立の儀になり、神霊櫃を御錦蓋(ごきんがい)で覆い神馬(しんめ)に載せて、下社へ戻る儀式である(参照資料 1-3)。

賀茂波爾神社は、もともとは「赤の宮」と言われ、祭神は「波爾安日子神(ハニヤスヒコノカミ)」「波爾安日女神(ハニヤスヒメノカミ)」であり、これらの神のご神徳は大地の守護神である。「波爾」は土師器(はじき)、土を意味する。鴨県主本系の系流で賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)を祖とする西泥部氏(にしつちべし)が社職とする土師器(はじき)の製作を世襲(神饌を日常奉る土器の製作に従事する)していることから波爾の神を祀ったのである。賀茂氏にとって祭祀すべき重要な神の一つであったことに違いない。路地祭では、祝詞と還城楽(げんじょうらく)を奏す。還城楽は雅楽の唐楽の曲名の一つで、蛇を好んで食べる胡国(ここく:北モンゴルにいた異民族)の人が蛇を見つけて喜んだ様を舞にしたものと伝える。

御蔭祭の最後は、糺(ただす)の森において、東游(あずまあそび)と呼ばれる舞楽が奉納される「切芝神事」の後、御生木(みあれぎ)を神馬から本殿に移して夕刻に終る。

「切芝神事」とは、御祭神賀茂建角身命が、東の倭国から船に乗り西方に向いて御出でになったと、氏人(うじびと)たちの伝える古事によって御祭神の来歴を奏することが神事であった。切芝神事では、「東游」が奏される。「游」とは神と人が交流することを伝えている。東游は東国地方の風俗舞であり、一説には第二十七代安閑天皇(六世紀)の頃、駿河国の宇戸浜(うどはま)に天人が降りて歌い舞った姿をなぞらえ国人道守(こくじんみちもり)が作ったと言われている。第五十九代宇多天皇の寛平元年十一月賀茂の臨時祭の時に始めて用いられてから神事舞として諸社の祭典に奏(そう)られるようになった。曲は一歌、二歌、駿河歌、求子(もとめご)歌、大比礼(おおひれ)歌からなる一大歌舞組曲で、 京都の葵祭で奏されるのが有名である。舞人六人、拍子歌方数人、和琴(わごん)、篳篥(ひちりき)、高麗笛(こまぶえ)の編成で、舞は駿河舞と求子舞の二つで、動きの少ない上品な舞と云える。

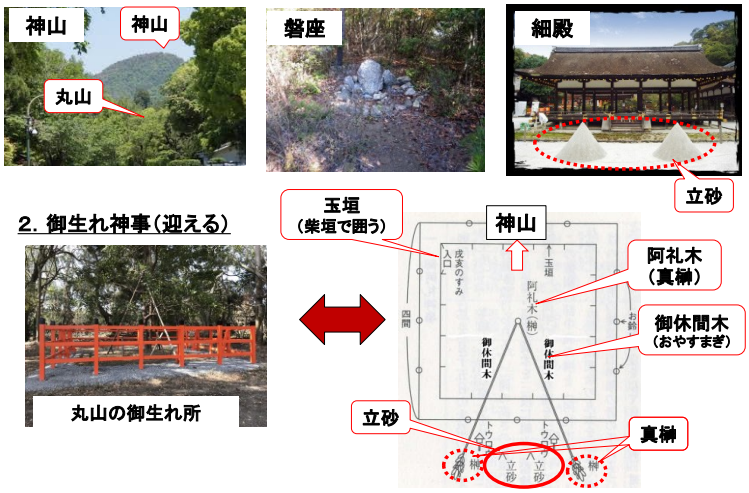
上社の御阿礼(みあれ)神事を見てみましょう。御生(みあれ)処は北約二キロにある「神山(こうやま)」とその南麓の上社に近い「丸山(まるやま)」の南野辺りである(参照資料 1-4-①)。神山の山頂に露出する大きな岩石はカモのカミ(雷神)の「磐座」とされ、「垂迹石(すいじゃくいわ)」と言われてきた。

上社の御阿礼神事は、葵祭の前儀として、神山との間の丸山の一角にある御生野(みあれの)に祭場を作り、五月十二日の夜に秘儀として御阿礼神事が行われる。下社とは時間が異なる。御阿礼神事は全神職と注矢刀禰(やとね)五人が参列し、深夜に神座(かみくら)で御生(みあれ)された神霊の新たな命を暗闇で迎える。(注)神を遷霊する祭官。

参照資料1-4-①：上賀茂神社の御生れ

出典:ウィキペディアから原図引用

1. 御生れ処



2. 御生れ神事(迎える)

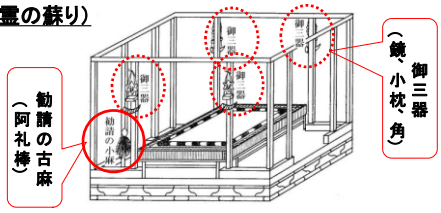
丸山の御生れ所

参照資料1-4-②：上賀茂神社の御生れ

出典:ウィキペディアから原図引用

3. 本殿への捧持

4. 御生れ神事(神霊の蘇り)



本殿内の御帳台

神霊を真榊(まさかき)に移し、奉持して本殿前の棚尾社に二本、参道わきの遥拝所(権殿を指す)に三本樹(た)て、宮司が本殿で祝詞(のりと)する(参照資料 1-4-②)。棚尾社の祭神は櫛石窓神(クシイハマトノカミ)、豊石窓神(トヨイワマドノカミ)で、家屋に悪霊が入らないように門を守護する神様で、家内安全の神様でもあります。内陣の御帳台

(みちょうだい)には「勧請(かんじょう)の古麻(こぬさ)の阿礼棒(あれぼう)と御三器(ごさんき)の鏡、小枕(をまくら)、角を立てかける。神霊を勧請の古麻と「御三器」に取りつかせ、若々しく神威が蘇った神霊を迎える。遥拝殿は、上社の社伝は中央より右に本殿、左に注権殿(ごんでん)があり、中央からは丸山を通して神山の磐座を遥拝する形式(透廊:すいろう)になっている。神山の遥拝所でもあります。権殿は遷宮のための予備殿であり、神山の遥拝所にもなります(参照資料1-4-②)。

社史では、天武天皇六年(677年)、山背国が鴨神宮造営(式年遷宮)と記述する。上社の社殿は既に存在していたことを意味する。

第三話　賀茂氏と秦氏の繋がり

賀茂氏と秦氏は何らかの関係があったのではとよく言われます。その証左となる神社が木嶋坐天照御魂神社(このしまにますあまてるみたまじんじゃ)、通称「蚕(かいこ)の社(やしろ)」ともいわれます。この神社は将に葛野秦氏(かどのはたし)の中核の拠点に建てられています。祭神から見ていきましょう。

祭神は、天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)、大国魂神(オオクニタマノカミ)、穂々出見命(ホホデミノミコト)、鵜茅葺不合命(ウガキフキアエズノミコト)、瓊々杵尊(ニニギノミコト)です。将に造化三神から神武天皇前までの天皇直系の神々です。それに出雲の大国魂神が加わっています。弥生時代に来た大量の秦氏は徐福集団と言われています。その当時の葦原中国(あしはらなかこく)の支配者は大国主命です。徐福集団もその支配者のその許諾のもとに住み着いたのであろうと思われます。又、神社名「木嶋坐天照御魂神社」に表されているように、天照御魂神(アマテラスミタマノカミ)の神社なのです。天照御魂神とは籠神社(このじんじゃ)の祭神である「彦火明命(ヒコホアカリノミコト)」をいい、この神は瓊々杵尊(ニニギノミコト)の兄神です。亦名を饒速日命(ニギハヤヒノミコト)といい、また、物部氏や尾張氏の祖神となっている神でもあります。(詳細はコラム参照。)

神社の由来を見てみましょう。

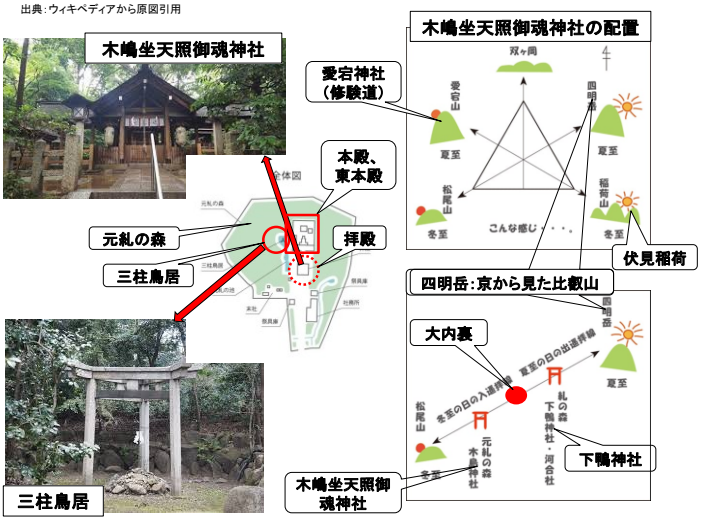
木嶋坐天照御魂神社がある嵯峨野・太秦周辺は渡来系氏族の秦氏が開拓した秦氏のゆかりの地で、広隆寺・松尾大社・蛇塚古墳などの関係寺社・史跡で知られることから、木嶋社もまた秦氏ゆかりの神社といわれる。通称は「木嶋神社(このしまじんじゃ、木島神社)」や「蚕の社(かいこのやしろ、蚕ノ社)」ともいわれる。本殿は境内の中央北寄りの、やや高所に建てられていて、本殿の東側には蚕養神社(こかいじんじゃ:東本殿)が鎮座し、「蚕の社」の通称は同社に由来する。秦氏は機織りをして、蚕から絹を取り出すという技術を持ってきた。機織の「ハタ」から、秦氏になったという説があり、その体を表す神社である。古くから祈雨の神として信仰され、境内には珍しい三柱鳥居(みはしらとりい)があることで知られる(参照資料 1-6)。

三柱鳥居は、神社境内の北西隅には「元糺の池(もとただすのいけ)」と称する神泉があり、この元糺の池の中には三柱鳥居(三ツ鳥居/三面鳥居/三柱鳥居)が建てられている。この三角鳥居はキリスト教の注三位一体を表しているのではないかと言われる。秦氏がユダヤの民であったとすれば不思議ではない。(注)キリストは父である神と、神の子であるイエス・キリストと、聖霊の姿で現れるという教え。

元糺(もとただす)の池は、木嶋社の社叢(しゃそう:社の森)の「元糺の森」の中に神泉をもつ池である。この池の水は諸病に

参照資料1-6：木嶋坐天照御魂神社とその配置

出典：ウィキペディアから原図引用



効くとの信仰があった。伝承では、木嶋社の社叢（しゃそう）を「元糺（もとただす）の森」、神泉を「元糺の池」という。下鴨神社の森が「糺（ただす）の森」と呼ばれるようになる以前は、木嶋社の社叢が「糺の森」と呼ばれていた。嵯峨天皇の時代、下賀茂神社の参道の社叢を「下鴨糺の森（しもかもただすのもり）」と名づけ、木嶋社に元々あった社叢の「糺の森」を「元糺の森」に変えた。この意図は賀茂大社がより朝廷に近いということを表したのである。秦氏のゆかりの神社にある名称を下鴨神社に遷すということは秦氏の意図が働いていることは明らかである。さらに、これらの神社と大内裏（だいだいり）の関係をみるとよくわかる（参照資料 1-6）。物理的位置づけの不思議というより、意図通りの設計なのであろう。木嶋社の「元糺の森」と「下鴨糺の森」を結ぶラインの中間点に大内裏が位置付けられている。大内裏は秦河勝がその邸宅を譲った地である。このラインは夏至の日出と冬至の日没ラインとなっている。

下社の祭神、賀茂建角身命（カモタケツヌノミコト）は八咫烏といわれる。イワレビコが熊野で道に迷った際、案内をする。大和入りの前に、長髄彦との戦いで光り輝く「金鵄（キンシ）」が表れ、長髄彦の軍は総崩れになり勝利する。金鵄は八咫烏の化身と言われ太陽に住む金鳥で天照大御神の使いである。日本国旗掲揚時の先端の金玉は金鵄を表し、旗竿の白黒のストライプは八咫烏を表す。鴨族は神道守護の最高権威である賀茂大社を牛耳っている。全国の神社は伊勢神宮を筆頭にすべて天皇のものであり、天皇陛下が神道の元締めである。その天皇を守護する最高の地位に、上賀茂・下鴨のカモ氏「鴨族」がいるのである。鴨族とはユダヤ人原始キリスト教徒の祭司のレビ系秦氏という。神道における祭祀一族は物部氏、中臣氏、卜部氏、忌部氏（いんべし）などがあり、最も古いのは忌部氏であり、賀茂氏は忌部氏の中の忌部氏と言われる。

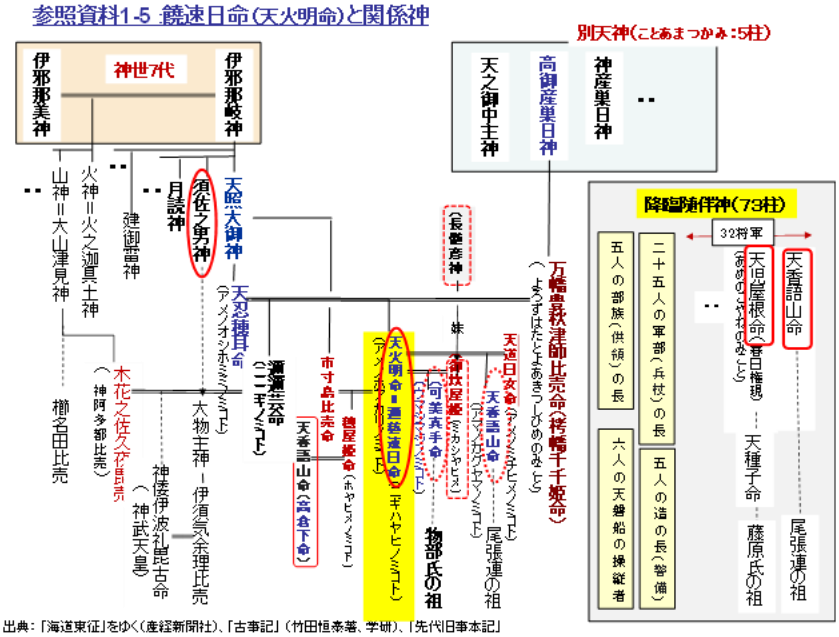
コラム：「饒速日命（天火明命）と関係神」

記紀は高天原から三つの降臨があったことを記述する。降臨の順に、素戔嗚命（スサノオノミコト）の出雲への降臨、饒速日命（ニギハヤヒノ命）の大和への天孫降臨、そして瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の鹿児島高千穂の峯への天孫降臨である。

ニギハヤヒノ命の降臨には随伴神がいます。三十二柱の将軍、五柱の部の長、五柱の造の長、二十五柱の軍部の長、船長、かじ取りなどを率い、「天磐船（アマノイワフネ）」に乗って天降っている。三十二柱の将軍の中には、尾張の天香語山命（アマノカグヤマノミコト）、香取・鹿島神宮で祀られている中臣氏の祖の天児屋命（アメノコヤネノミコト）、軍部の長には物部氏がいる。ニニギハヤヒノ命の降臨は、「出雲の国譲り」の前の出来事である。

ニギハヤヒノ命の降臨地は、河内国河上の哮ケ峰（いかるがのみね：現在の生駒山）そこに石切劔箭神社（いしきりつるぎやじんじゃ）が建つ。その地には長髄彦がいました。日本書紀でも、東征に向けて塩土老翁（しおつちのおじ）がイワレビコに伝える。「東の方に良い土地があって、青い山が取り巻いている。その中に天磐船（アマノイワフネ）に乗って、・・・そのとび降りてきた者は、饒速日（ニギハヤヒ）というものだろう。そこへ行って都をつくるにかぎる。」と記述する。ニギハヤヒノ命は天火明命（アメノホアカリノミコト）と言われ本命の天孫降臨、邇邇芸命（ニニギノミコト）の兄神である。ニギハヤヒノ命の后に御炊屋姫（みかしやひめ）と天道日女命（あめのみちひめのみこと）があり、それぞれ物部氏と尾張氏の始祖を生む。両氏族は共に天火明命を祖神とする。

参照資料1-5 饒速日命（天火明命）と関係神



出典：「海道東征」を巡く（産経新聞社）、「古事記」（竹田恒泰著、学研）、「先代旧事本記」

◆第二章「賀茂祭(葵祭)と賀茂社の社殿」の目次 ◎

以降省略

参考図書

＋「日本の古社　賀茂社　上賀茂神社・下鴨神社」　岡野弘彦・櫻井敏雄・三好和義著（淡交社）

＋「賀茂御祖神社」賀茂御祖神社編（淡交社）

＋「上賀茂神社へのいざない」賀茂別雷神社（賀茂別雷神社）

＋「葵祭の始原の祭り　御生神事　御蔭祭りを探る」下鴨神社宮司新木直人著（ナカニシヤ出版）

＋「元伊勢籠神社御由緒略記」（元伊勢籠神社編）

＋「元伊勢籠神社の略誌と神道哲学」　宮司　海部光彦著（（元伊勢籠神社編）

＋「元伊勢籠神社しおり」（元伊勢籠神社編）

＋「日本の神社　籠神社」（デアゴスティーニ研）

＋「失われた徐福のユダヤ人「物部氏」の謎」飛鳥昭雄・三神たける著（学研）

＋「日本書紀」（宇治谷　孟著、講談社）

＋「古事記」（竹田恒泰著、学研）など

おわりに

日本では、そこの住民に恩恵を与えた人を神として祭るために神社を作り、代々その祭祀を行ってきました。第五シリーズ「日本の神社と神々」で取り上げた九つの神社、「熊野大社」「伊勢神宮」、「出雲大社」、「住吉大社」、「宗像大社」、「宇佐大社」、「賀茂大社」、「籠神社」、「眞名井神社」は記紀に係る代表的な神社をです。

本冊子で取り上げた第五シリーズ第四部で「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」を取り上げました。この両神社は日本の伊勢神宮に関わる神道の由来に関わる神社です。伊勢神宮との関係が見えて来たのではないでしょうか。

賀茂大社、籠神社ともに中国の正史である史記に記述される「徐福伝説」が日本の神道形成のきっかけであることが理解できたと思います。日本の自然信仰に徐福と共にやって来た司祭が日本の神道の祭祀を形作ったと想像できます。

しかし、日本独自の宗教です。渡来した彼らは自然信仰と祖霊信仰の中に彼らの宗教(ユダヤ教？)の適合性を見つけ彼らは日本化していったものと思われます。戦争に明け暮れる大陸と比べ、恵み豊かで戦争のない日本は日本化するに値する国だ他tのかもしれません。

第一回の渡来が吉野ヶ里、そして「モノノベ」と呼ばれていたその集団の一部が葛城に移動する。第二十一代雄略天皇によって葛城氏は滅ぼされ、山背の賀茂へ移動する。一方、

第二回の徐福の渡来は、丹後の眞名井である。国宝の海部氏の系譜を見ると、海部氏と祖先を同じくする渡会(わたらい)氏が伊勢神宮の禰宜(ねぎ)となり、伊勢神道の祭祀を規定し、全国の神社の典範となる。丹後にも徐福が帯同した司祭がいたことを表している。籠神社が伊勢神宮の唯一神明造りであることからもそれは伺える。

日本の大王および天皇が賀茂大社や籠神社の祭祀をもとに神道の形態を形作ったものであることが想定できる。神道は天皇家を守護する宗教であることから、賀茂大社、籠神社は天皇家の最も近い神社とする謂れがあったのである。

【著者略歴】 井上正和（いのうえまさかず）

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM（株）入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社　情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月　神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ（各 5 回講座）を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」
第四部「賀茂大社と籠神社・眞名井神社の神」

発行日　令和7年8月吉日　初版発行
著　者　井上　正和

発行所　有限会社　情報戦略モデル研究所
〒226-0006　横浜市緑区白山2－2－E－216
TEL：045-934-7254
URL：　http://www.ism-research.com/

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。
お問い合わせ：　ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9912583-7-4
C1021 1000E

発行:情報戦略モデル研究所
価格:本体価格 1,000 円＋税

ISM
研

主な内容

はじめに
第1章 「伊勢神宮の神と特性」

第2章 「伊勢神宮の由来と広がり」

第3章 「大社造りと社殿の神々」

第4章 「出雲の神々と大社創建」

第5章 「出雲大社の祭祀」
おわりに